

モノダ文の周辺

井島 正博

はじめに

形式名詞モノを用いたさまざまな複合辞のなかで、文末のモノダに関しては、井島（二〇一二・三）でコトダ・ワケダと比べつつ論じた。また、形式名詞トコロを用いたさまざまな複合辞に関しては、井島（二一〇五・三）で論じたが、モノの複合辞に比して、こちらは文法化の進行がそれほど進んでいない、言い換えれば文法化が時代的に遅れて進行したために、トコロが（場面・状況）を表わすという本質的な意味からの派生的な説明が可能であった。それに対して、モノの複合辞は、恐らく文法化が時代的に早いため、そしてもう一つは、形式名詞モノは形式名詞トコロに比べて抽象度が高いために（たとえばモノの意味を〈事物〉〈物品〉などととらえても、現代語のモノの複合辞の意味機能を説明するためにはおよそ役に立たない）、本質的な意味からその派生のあり

さまを説明することは到底できそうにない。

したがって、本稿でとる方法論は、〈事物〉〈物品〉などといった本質的な意味をもとにした派生という観点ではなく、井島（二〇一二・三）でもとった、統語的な展開のありさまをたどるといふやり方であり、そのために必要に応じて古典語の展開の状況も参観することにした。

1 モノ構文の派生原理

井島（二〇一二・三）では、モノダ文・コトダ文の機能の違いの根本には、形式名詞モノ・コトに對する連体修飾のしかたの違いがあると論じた。すなわち、モノに對しては同一名詞連体をするのに対して、コトに對しては同格連体をする（同一名詞連体もないわけではないが、こちらはコトダ文にはならない）。そして、モノに同一名詞連体をするのが、モノダ文が多様な用法を持つことにつながるのではないかと

考えた。すなわち、モノが同一名詞連体をするということは、連体修飾句Pモノ+断定助動詞ダは、主語Aガに対して述語句を構成するはずである（たとえば「タバコは」〔気持ちを落ち着けるものだ〕）。しかし同じ字面でありながら、この構造からAガPという命題にモノダという助動詞相当の形式が接続したと異分析されて（「タバコは気持ちを落ち着ける」ものだ）、モノダ文が成立したと考えた。

i 「Aガ」〔Pモノダ〕

ii 「AガP」モノダ

こう考えると、もともとこの名詞述語文の構造は、Aという対象に対してPという内容によって特徴付けるものであるが、この「述語付け」にはさまざまなタイプがありうることになる。まずはAの特性・機能を述べるようなもの（一般論）から、Aに関する過去の経験（回想）、Aによって引き起こされた情意（感動）など、さまざまな「述語付け」が可能であり、そこからモノダ文のさまざまな用法が派生したと考えた。ここで特記しておくべきことは、モノダ文の多岐にわたる用法は、形式名詞モノの「意味」から派生したものと考える必要はないということである。

さて、本稿では、モノダ以外の、モノが用いられたさまざまな複合辞について考察していこうとするが、それらの複合辞の意味機能はそれぞれ独特のものであり、相互の関係を見出すのは非常に難しい。とはいっても、ここに二つの派生過

程を想定したい。一つはモノダ（古典語ではモノナリ）を経由して派生されたもの。これはモノダの意味用法を引き継ぎ、特に（一般論）という意味を受け継ぐものである。もう一つはモノダを経由せず、直接派生されたもの。こちらはノダ・コトダなどの名詞述語文一般もそうであるように、（誰かの認識内容）、その中でも特に（話し手の信念）という意味を受け継ぐものである。この二つの派生のしかたによって、さまざまなモノ複合辞の派生の跡をたどりたい。

また、モノ複合辞同士の関係が見えにくくなっている理由として、時代が下るに従って局地的な文法化が進行したために、現代語だけを見ていたのでは派生の過程がたどりにくいことが挙げられる。そこで、本稿では、歴史的な展開の有様にも配慮して検討を進めることにしたい。そうすることによって、現代語だけを見て構成した議論よりもアドホックな論を抑えることができるのではないだろうか。

2 モノカ

モノカの全体像はかなり複雑である。とりあえず、全体を〈反語〉〈希望〉〈詠嘆〉〈適当〉〈方策〉〈疑問〉に分けて考えてみたい。

反語という、話し手はすでに結論を持っていて、それと逆のことを一旦疑問の形で提出し、さらにそれを強く打ち消す表現（くだらうか、いやそうではない）を指すが、このような定義は古典語には当てはまっても、文法化の進んだ現代語には必ずしも当てはまらない。多くの場合、話し手が相手の発話あるいは（期待）を打ち消す際に用いられるが、その用法は以下のように多岐にわたる。

まず、話し手の否定的な意志を表わす用法（否定意志）がある。

(1) a 「Kと私は同じ科へ入学しました。Kは澄ました顔を出して、養家から送ってくれる金で、自分の好きな道を歩き出したのです。知れはしないという安心と、知れたって構うものかという度胸とが、二つながらKの心にあつたものと見るよりほか仕方ありません。Kは私よりも平気でした。…」

b 「気違い！」「気違いで悪いか」「誰がそんな気違いを、相手になんかしてやるもんか」

c 「…もう洗ってくれないの？こんなな私が大きくなっちゃ、洗うのは厭？」「厭なことがあるもんか、今でも洗ってやりたいんだけど、実は遠慮していただよ」

谷崎潤一郎『痴人の愛』339

夏目漱石『こころ』366

同 337

d 「誰があんな女を、まじめに相手にするものか」と思っていた。

e 父は激怒し、スキイの旅費なんかやるものかと言いつ、娘に盃を投げつけた。

同 88

f おれは死なない。死んでたまるものか……と江藤は思っていた。おれの命は、登美子ひとりを助けるために死んでもいいような、そんな安っぽい命ではない。

同 112

g 「わたしに半分頂戴！」「いやだ」鮎太はこれだけやるものかと思った。

井上靖『あすなる物語』39

次にそれを聞き手に向けて、聞き手の行為を制限する用法（禁止）がある。この用法はおよそ「〜奴があるものか」という形をとる。

(2) a 「…すると、また一人が言うには——」と言いかけて、やがて思付いたように、「しかし、まあ、止そう」「何だ、言いかけて止すやつが有るもんか」と背の高い尋常一年の教師が横鎗を入れる。

島崎藤村『破戒』551

b 「君は馬鹿だよ。あんなお饒舌に密書の在りかを云う奴があるものか」と鱒次郎は微笑しながら鱒太を非難した。

志賀直哉『赤西鱒太』100

c 「そう云わないでくれ。同じ死ぬのでも、犬死はつら

いからね。二年近くかかって作った報告書を白石の殿様に見せずに天井で鼠の糞と一緒に腐らして了うのは死ぬにも死にきれないよ」「それはそうかも知れないが、人もあるうにあんな奴に打ち明ける奴があるものか」

同 100

さらにいろいろな事柄について、話し手の否定的な推測をする用法（否定推測）がある。

(3) a 女はまた急に苦しみ出して、身をもがいて立ち上ると、部屋の方の隅に突っ伏した。「いけない、いけない。帰る、帰る。」「歩けるもんか。大雨だよ。」

川端康成『雪国』52

b 「うん、あの時分には軽かったね。十二貫ぐらいなもんだつたらうよ」「今だったら譲治さんは潰れちまうわよ」「潰れるもんかよ。嘘だと思ふなら乗って御覽」

谷崎潤一郎『痴人の愛』339

c 「あんまり病人の側にばかりいないで、少しは散歩くらいなすっていらつしやらない？」、「この暑いのに、散歩なんか出来るもんか。……夜は夜で、真っ暗だしさ。……それに毎日、病院の中をずいぶん往ったり来たりしているんだからなあ」

堀辰雄『風立ちぬ』216

d 「あとの事なんか、今云わないで……。滝が好きならその男と一緒にするようにしてやればいいじゃないじゃありませんか」「そう簡単に行くものか」

また、話し手に関する相手の推測を打ち消して事実を述べる用法（話し手の事実）がある。

(4) a 「あれ、進だつて遊んでいやすよ」というのは尚吾の声。「なに、遊んでる？」と細君はすこし声を震わせて、「遊んでるものか。先刻から御子守をしていやす。そんなお前のような役に立たずじゃねえよ。……」

島崎藤村『破戒』110

b 「兄さんが帰って来るのが順ですわ」と私が云った。「おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。

夏目漱石『こころ』254

c 「浜田、お前綺羅子にモーションをかけたのかい？」「ふざけちゃいかんよ、僕あそんなことをするもんかよ」

谷崎潤一郎『痴人の愛』237

d 「酔つてやしないよ。ううん、酔つてるもんか。苦しい。苦しいだけなのよ。性根は確かだよ。ああつ、水飲みたい。ウイスキーとちゃんぽんに飲んだのがいけなかったの。あいつ頭へ来る、痛い。あの人達安壇を買って来たのよ。それ知らないで。」などと云つて、掌でしきりに顔をこすつていた。

川端康成『雪国』50

e 「君はあの時、ああ言つてたけれども、あれはやつぱり嘘だよ。そうでなければ、誰が年の暮にこんな寒いと

志賀直哉「好人物の夫婦」84

ころへ来るものか。後でも笑やしなかったよ。」

同 57

f 「あなた……」彼女の声は今度は殆ど中性的なくらいに聞えた。「いま、泣いていらしたんでしょ？」私はびっくりした様子で、急に彼女の方をふり向いた。「泣いてなんかいるものか。……僕を見て御覧」

堀辰雄「風立ちぬ」 216

そして、さまざまなことに關する聞き手の推測を打ち消して事実を述べる用法（一般的事実）がある。

(5) a 「ああ、氣違ひよ。……あたし今夜は氣違ひになるほど讓治さんが可愛いんだもの。……それともうるさい？」
「うるさいことなんかあるものか、僕も嬉しいよ、氣違ひになるほど嬉しいよ、お前のためならどんな犠牲を払ったって構やしないよ。……おや、どうしたの？ 又泣いてるの？」

b 登美子は江藤のそばに肩を寄せてくると、小さな声で、

「心中なの、先生……」と、ばかなことを言った。こんな心中があるものか。女は自分ひとりで死んでいる。男のために何もしていないし、この姿から、男に対する愛情のひとかけらも察することはできない。

石川達三『青春の蹉跌』 109

c モミジ屋が塙をとりあげて、あとをぐるりとつぎながら、女のほうにも、どうぞというふうにながすと、「あ

たくし、もう結構。」なにが結構なものか、なれた手つきで二杯目を器用にあおったコップに、爪の真赤なのがきらきらした。

石川淳「変化雑載」 591

d 「それなら、あの場合誰に打ち明ければよかったのだ」「誰に打ち明ける事が要るものか。そこらに如才はあるものか、君が死んだと聴けば直ぐ飛んで来て隙を見て俺が自身で探し出してよう」 志賀直哉「赤西蠣太」 100

e 「そんなら天井のどの辺にどう隠してあるか今でも見当がつくか」「見当も何もあるものか、あの按摩が精しく教えてくれた。それが君がもう助かると決って暫くしてそんな事を俺に云うのだ。……」 同 101

f 「声が高い？」叔父は笑いながら、「ふふ、俺のような皸枯声しやがれこゑが誰に聞えるものかよ。それはそうと、丑松、へえ最早これで安心だ。是処こゝまで漕こぎ付けければ、最早大丈夫だ。どのくれえ、まあ、俺も心配したろう。ああ今夜からは三人で安あんきに寝られる」 島崎藤村『破戒』 321

g 丁度この上のほり口の辺あたりに美濃みのの蓮大寺れんたいじの本堂の床下まで吹抜けの風穴があるということを経してから聞きましたが、なかなか其処こゝどころの沙汰ではない、一生懸命、景色も奇跡もあるものかい、お天気さえ晴れたか曇ったか訳が解らず、目まじろぎもしないですたすたと捏こねて上る。

泉鏡花「高野聖」 29

否定助動詞を伴って、ナイモノカ(ヌモノカ)という形で、
 〈希望・願望〉を表わす用法がある。これは、ナイモノカ全
 体で文法化した形と思われ、ナイあるいはモノあるいはカの
 いずれかを除くと、〈希望・願望〉の意味は生じない。ちな
 みに、用例調査してみると、この用法が用いられる資料に
 はかなり偏りがあることがわかる。

(6) a (七月X日) 山のように厚いノートはないものか、枕
 のようにつかいノート。 林芙美子『放浪記』635

b さて、朝になれば、いよいよまた活動出発の用意。雀
 がよく鳴いている。上々の天気。硝子窓から柿の葉が覗
 いている。台所の方で小さい唄声がきこえる。私はふっ
 と思いついて、この下宿の女中になれぬものかと思う。
 客部屋から女中部屋に転落してゆくだけだ。給料はいら
 ない。ただ食べさせてもらって雨露をしのげればいい。

同 666

c あの編輯者メ、電車にはねられて死なないものかと思
 う。雑誌も送って来やしない。本屋で立読みをすると、
 私の童話が、いつの間にか彼の名前で、堂々と巻頭を飾
 っている。頭も尻尾も書きかえられて、私の水仙と王子
 がちゃんと絵入りで出ている。

d 今夜からは、寒いので、親子三人どうしても一つの寝
 同 811

床にはいらねばならぬ。蒲団の後からぬつと脚をさしこ
 む気がしない。ああ、せめて二枚の蒲団よ、どこからか
 降って来ないものか。しんしんと冷える。母と義父はも
 う寝床で背中あわせに高いびきなり。

同 894

2・3 詠嘆

何らかの事実を受けて、それに対する〈詠嘆〉を表わす用
 法がある。その場合、「こんな」「こう」などの指示語によっ
 て事実を受けるものがほとんどである。およそ(ノ)カと置
 き換えも可能であるが、モノカを用いると一般的な事実に気
 付いた、といったニュアンスが生じるように思われる。

(7) a 「ます。私もあなたに逢い、あなたとお話し、あなた
 と一緒に遊んだり笑ったりするまではこの世にこんなよ
 ろこびがあり、人間がこんなにまでよろこべるものかと
 云うことを知りませんでした。武者小路実篤『友情』209
 b まったく何という変わった世界でしょう！ こういう光
 景を見ることに、こんな国もあるものか、こんなにして暮
 らしている人もいるものか——、とよくそう思いました。

竹山道夫『ビルマの竖琴』139

c いつもは父親に起されなくつちや眼がさめないのに、
 翌朝はまだ暗いうちに、ぱつと眼があいてしまった。自
 分の仕事となると、こうも違うものかと、自分で自分が

おかしくなった。

山本有三『路傍の石』 955

d 女中風な女が、一番不快だった。腹が大きくなると、こんなにも、女はひねくれて動物的になるものか、彼女達の眼はまるで猿のようだった。林芙美子『放浪記』 383

2・4 適当

タモノカの形で、まだ実現していない話し手の行為に関して、どうすればよいかという話し手の逡巡を表わす用法がある。およそバイノカに置き換えることができる。モノダの直前のタは〈過去〉テンスを表わしているわけではなく、せいぜいある事態の〈実現〉を想定した用法とでも説明することになるのだろうか。再考を俟ちたい。

(8) a いったい修理にきた電気屋に故障の理由をなんといつて説明したものか頭が痛んだ。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 517

b 書附を前へ出された与力は、それを受け取ったものか、どうしたものかと迷うらしく、黙っていちの顔を見卸していた。

森鷗外「最後の一句」 385

c さあ、丑松もこし躊躇わずにはいられなかった。「先生、先生」と口の中で呼んで、どうそれを切出したものかと悶いていると、何か目に見えない力が背後にあって、妙に自分の無法を押し止めるような気がした。

島崎藤村『破戒』 299

d 記事の取り扱いは全く鮎太にも判らなかつた。明日の日本というものが判らない以上、どのような事をどのように書いていいものか見当はつかなかつた。鮎太はただ客観的にそれを何十行かの文章に綴つた。

井上靖『あすなる物語』 313

2・5 疑問

疑問と言っても、ある行為の背後にある何らかの事情を推測するような場合に用いられる。およそ(ノ)カとも置き換えることができるが、モノカを用いると、背後の事情に注目するようなニュアンスが生ずる。

(9) a 銀の杯はお揃で、どれにも二字の銘がある。それは自然の二字である。妙な字体で書いてある。何か抛があつて書いたものか。それとも独創の文字か。

森鷗外「杯」 8

b 縁側に居た白痴は誰も取合わぬ徒然に堪えられなくなつたものか、ぐたぐたと膝行出して、婦人の傍へその便々たる腹を持つて来たが、崩れたように胡坐して、頻にこう我が膳を視めて、指しをした。

泉鏡花「高野聖」 92

c ああ云う男が、いい歳をしてどう云うつもりでダン

スをやる気になったものか？いや、考えると自分も矢張あの男と同じ仲間じゃないのだろうか？

谷崎潤一郎『痴人の愛』163

d 平中は頭を擡^{もた}げて見た。が、あたりにはさっきの通り、空焚きの匂が漂った、床^{ゆか}しい闇があるばかりである。侍従は何処へ行ったものか、衣^{きぬ}ずれの音も聞えて来ない。

芥川龍之介「好色」305

e パバのいないベニは淋しそうだった。河水の音を聞いて、コドクを感じたものか、ベニは指を噛んで泣いている。

林芙美子『放浪記』404

f 鮎太はなんとなく不可^いないものが、静穩な祖母と自分の二人だけの生活を攪^{かく}乱^{らん}しにやつて来たような気がした。そうした冴子への印象は、彼女の初対面の時の印象から来たものか、冴子という少女に対する村人の口から出る噂がそうした余り香しくないもので、それがいつとはなしに、鮎太の耳に入ってきたことに依るのか、それははつきりしなかった。あるいはその両方であったか知れない。

井上靖『あすなる物語』3

g 私はそのニュース・フィルムを見ながら、もし自分が何かの理由でその圧倒的な量の水を吹きだすダムの下にいたとしたらどんなことになるものかと想像して子供心にぞつとしたものである。

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』855

h 「パブロ・カザルスの『ブランデンブルグ』は聴いたことある？」「ない」「あれは一度聴いてみるべきね。正統的とは言えないにしてもなかなか凄^じ味^みがあるわよ」「今度聴いてみる」と言ったが、そんな暇があるものかどうか私にはわからなかった。

同 1300

2・6 古典語のモノカ

以上のような広がりを持つモノカであるが、どうして現在のような用法を持つに至ったのか、現代語だけを見ていたのでは十分な説明はできない。モノカが歴史的にどのような展開をしてきたのか、古典語にまで視野を広げて検討していきたい。ここで、支障のない限り、モノカモ・モノカハ・モノカナなどもモノカの用例と扱うことにしたい。

モノカの用例そのものは、すでに上代から見出される。ただしその働きは、以下のように、〈反語〉〈疑問〉〈詠嘆〉といったものに限られる。そのうち〈反語〉の用例が、最も多く見出される。多くの例が推量助動詞に下接するが、その他に否定助動詞、過去助動詞に下接するものもある。

(10) a はじめより長く言ひつつ頼めずはかかる思にあはましものか(相益物鐔敷) 『万葉集』巻四 六二〇

b こと放けば沖ゆ放けなむ湊より辺^つかふ時に放くべきものか(可放鬼香) 同 巻七 一四〇二

c 玉かぎる昨日の夕見しものを今日の朝に恋ふべきものか(可恋物) 同 卷十 二三九一

d あしひきの山鳥の尾の峰ひたせ越え一目見し児に恋ふべきものか(応恋鬼香) 同 卷十一 二六九四

e 眞野の池の小菅を笠に縫はずして人の遠名を立つべきものか(可立物可) 同 卷十一 二七七二

f 心なき鳥にそありけるほととぎす物思ふ時に鳴くべきものか(奈久倍吉毛能可) 同 卷十五 三七八四

中には、若干(疑問)と解釈できる例も見られる。

(11) 天雲のそくへの極み遠けども心し行けば恋ふるものかも(恋流物可聞) 『万葉集』卷四 五五三

(12) 断をする形容詞に下接する。
《詠嘆》の例も少なからず見出されるが、多く何らかの判断

a 海神わたなづみはくすしきものか(霊寸物香) 淡路島中に立て置きて白波を伊豫に廻らし… 『万葉集』卷三 三八八

b :しもと取る里長が声は寝屋処まで来立ち呼びひぬかくばかりすべなきものか(須部奈伎物能可) 世の間の道 同 卷五 八九二

c 味鎌あぢかまの瀉に咲く波平瀬にも紐解くものか(比毛登久毛能可) かなしけを置きて 同 卷十四 三五五一

d 世の中は数なきものか(加受奈积物能可) 春花の散り
のまがひに死ぬべき思へば 同 卷十七 三九六三

中古に入ってもおおよそ状況は同じである。やはり(反語)

の用例が多くを占める。特に『源氏物語』はその用例のほとんどが(反語)を表わす。

(13) a 昔、をとこ有りけり。恨むる人を恨みて、

鳥の子を十づゝ十は重ぬとも思はぬ人をおもふものかは、

といへりければ、 『伊勢物語』五十段 140

b 空蝉トヨトミ十君「かくけしからぬ心ばへはつかふものか。幼き人(小君)のかかること言ひ伝ふるは、いみじく忌むなるものを」と言ひおどして、 『源氏物語』空蝉 一 186

c (殿上童と隨身を) 召せば、御答して起きたれば、
源氏十殿上童と隨身「紙燭さして参れ。隨身も弦打して、絶えず

声づくれ、と仰せよ。人離れたる所に心とけて寝ぬるものか。惟光朝臣の来たりつらんは」と、問はせたまへば、

d 源氏十少納言「まだおどろいたまはじな。いで御目さましきこえむ。かかる朝霧を知らでは寝るものか」とて入りたまへば、「や」ともえ聞こえず。 同 夕顔 一 239

e いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、
臘月夜「臘月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、こなたさまには来るものか。(源氏は)いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。 同 花宴 一 426

f (柏木も)みづからも、大殿(源氏)を見たてまつるに気恐ろしくまばゆく、「かかる心はあるべきものか。」

なのめならむにてだに、けしからず人に点つかるべきふるまひはせじ、と思ふものを、ましておほけんきこと」と思ひわびては、
同 若紫下 四147

g 夕霧 土佐居雁「かかる夜の月に、心やすく夢みる人はあるものか。すこし出でたまへ。あな心憂」など聞こえたまへど、心やましようち思ひて、聞き忍びたまふ。
同 横笛 四346

また、中古には〈詠嘆〉の用法も少なくない。

(14) a ゆくひとまとまるもそでのなみだがはみぎはのみこそぬれまさりけれ
となんよめる。かくはいふものか。うつくしければにやあらん、いとおもはずなり。
『土佐日記』34

b かぢどりのいはく、「このすみよしの明神は、れいの」かみぞかし。ほしきものぞおはすらん。」とは、いまめくものか。さて、「ぬさをたてまつりたまへ。」といふ。いふにしたがひて、ぬさたいまつる。
同 51

c この時のところに、子うむつきほどになりて、よきかたはこびて、ひとつ車にはひのりて、一京ひびきつづきて、いとときにくきまで、ののしりて、この門のまへよりしも、わたるものか。
『蜻蛉日記』上123

d 七月になりて、相撲のころ、古き新しきと、一領つひんたつつひきつつみて、「これ、せさせ給へ」とてはあるものか。みるに目くるゝころぞする。
同 上124

e かうやうなるほどに、かのめでたきところには、子うみてしより、すさまじげに成にたべかめれば、人にくかりし心に、思ひしやうは、命はあらせて、わがおもふやうに、おしかへし、物をおもはせばやと思ひしを、さやうになりもていで、はては、うみのゝしりし子さへ、死ぬものか。
同 上128

このように、モノカに〈反語〉〈疑問〉〈詠嘆〉の用法が見られない状況は、近世まで続く。〈希望〉〈適当〉の用法が成立したのは、近代以降であると考えられる。

2・7 理論的考察

以上のように、上代・中古にモノカが〈反語〉〈疑問〉〈詠嘆〉という意味を表わしていたことは、むしろ係助詞ないし終助詞の力が〈反語〉〈疑問〉〈詠嘆〉といった意味を表わしていたことに起因すると考えられる。すなわち、くカとくモノカとがほぼ同様の意味合いを表わすということになるのだが、くモノカにはさらにくモノナリという形式名詞述語文(現代語のモノダ文)の持つ(一般論)という意味が重なったと見られる。すなわち、〈詠嘆〉は、何らかの現実に出くわして、一般的事実を改めて認識するということ(「世の中ははかないものだ」)であり、〈反語〉は、当面している現実が一般的事実に反すると解釈されること(「本当に人妻と付き合

ってはいけないものだろうか」ということになるのだろう。
ちなみに、案野（二〇〇三・三）は、〈反語〉のモノカと
カとの相違について以下のように論じている。

(15) a 貫太郎である。昼すぎから、行先も告げずに出かけて

いたのだが、石油カンをなわでぐるぐる巻きにしたものを
片手に下げ、縁側に仁王立ちでどなっている。

「なんだこのさまは。ギヤアギヤアふざけている病人が
あるか！」

台所から里子が飛んできて取りなした。

「少し熱が下がったんですよ。起き上がってみんなと一
緒に食べた方が食欲が出ると思って」

「食ったら早く寝ろ！」（寺内貫太郎）

この文において、文末をモノカに交代させることは文
法的には何ら問題がないと思われる。

b ギヤアギヤアふざけている病人があるものか。

ところが、(15) bをそのまま(15) aの文脈に組み入れると
不自然になってしまう。話し手である貫太郎が眼前の聞
き手（病人）をおとなしくさせるといふ機能はなくなる
と解釈されるのである。

つまり(15) aで表される発話内容は、話し手の突然の、
そして眼前の特定の対象に向けられた個別具体的なもの
である。一方(15) bの場合、世間一般にそういった（ギ
ヤアギヤアふざけている）属性を持つ「病人」はいな

い、という意味に解釈でき、発話内容としても眼前の対
象のみに関する個別具体性は希薄になる。どちらかとい
うと「ギヤアギヤアふざけている病人はないものだ」と
いう〈本性〉の否定的モノダ文が話し手の意識の根底に
あり、それが肯否を逆にした疑問表現の形をとって発話
されたものではないかと考えることができる。

このように、現代語においても、〈反語〉を表わすカに対
してモノカは（一般論）（引用文では〈本性〉）という意味を
引き継いでいるようである。

次に、〈希望〉用法について検討したい。〈希望〉用法は、
くナイモノカと否定助動詞にモノカが下接した形で、（肯定
の）〈希望〉を表わすものであった。古典語を調査してみ
ると、上代から近世まで、否定助動詞にモノカが下接した又モ
ノカという形は見出すことができる。しかしこれらは、否定
的な内容に〈反語〉や〈詠嘆〉を表わすモノカが下接したも
のに過ぎない。

このように、〈希望〉の（ナイ）モノカが成立したのは近
代以降ということになるのだが、この用法は〈反語〉からの
派生であると考えられる。すなわち、「くしないだろうか、
いやくする」という解釈から、「くしてほしい、くであれば
よい」という解釈への移行は容易に想像できる。ある未実現
の事態をあえて〈反語〉で表現する背後では、しばしば話し
手が当該事態の成立を〈希望〉していると考えられる。しか

し一方では、近世以前のヌモノカの用例のほとんどは〈詠嘆〉を表わしている。「くはないものだなあ」という解釈から、「くしてほしい、くであればよい」という解釈への移行も可能かもしれない。ただ、〈反語〉は実現した事態にも未実現の事態にも用いられるが、〈詠嘆〉は実現した事態にしか用いられない。言うまでもなく〈希望〉は未実現の事態に用いられるのであるから、やはり〈反語〉からの派生と考える方が妥当であろう。

いずれにせよ、近代に入って、ナイモノカが〈希望〉を表わす複合辞として文法化されると、これをナイ・モノ・カと分析して〈希望〉の意味を説明することはできなくなる。

最後に〈適當〉用法について触れておきたい。〈適當〉用法としてはタモノカが用いられるが、ここで用いられるタは、過去を表わすものではない。〈適當〉用法の文は、むしろ「これからどのような対処するのが適當か」といった未来の事態を表わし、タが表わすのは当該の状況が成立したことを想定するといった意味合いではないかと思われる。

この〈適當〉用法も、近世以前には用例を見出しがたく、近代以降に〈疑問〉用法から派生的に文法化したものと考えられる。というのも、〈適當〉用法にも〈疑問〉の意味合いは残っており、事実として「くか」と疑うのではなく、「くするのが適當か、くするほうがいいか」という判断の表現となっている。これもタ・モノ・カと分析して〈適當〉の意味

を導くことはできない(カの〈疑問〉の意味は生きていても)。

以上のように、モノカに関して、上代から存在する〈反語〉〈疑問〉〈詠嘆〉の三用法は、むしろカを持つ用法を継承したものであり、そこにモノナリ(モノダ)の表わす(一般論)といった意味が加わったものであると考えられる。そのため、これらのモノカはモノ(ナリ・ダ)とカとに分析することも可能である。それに対して、近代に成立したと思われる〈希望〉〈適當〉用法は、恐らく前者が〈反語〉から後者が〈疑問〉から派生して文法化したものと考えられる。そのため、これらのモノカはそれ以上分析することができない(分析の可否については、塩塚・江口(二〇〇六・一二)で議論されている)。

3 モノ

3・1 モノの用法

文末モノ文は、〈話し手の個人的事情〉を(理由)として述べる場合に用いられると言うことができそうである。また、以下に見るように、しばしばダツテ・デモのような逆接の接続助詞と共に用いられる。

(16) a 「そう極つた訳でもないわ。けれども男の方はどうし

ても、そら年が上でしよう」「だから先へ死ぬという理窟なのかね。すると己も御前より先にあの世へ行かなくっちゃならない事になるね」「あなたは特別よ」「そうかね」「だつて丈夫なんでももの。殆んど煩わづらつた例たとがないじゃありませんか。そりやどうしたつて私の方が先だわ」

夏目漱石『こころ』 168

b 「…先生の御父さんやお母さんなんか、殆んど同なじよ。あなた、亡くなったのが」「亡くなられた日がですか」「まさか日まで同なじじゃないけれども。でもまあ同なじよ。だつて続いて亡くなつちまつたんですもの」

同 171

c 「縁遠い生れつきか」と栄二が云つた。「暢のんき気な人たちだな」「だつてほんとなんですもの」おそのは細い肩を左右にゆすり、眼尻で栄二をみつめながら云つた、「――栄ちゃんあたしのことお嫁に貰もらつてくれないかしら」

山本周五郎『さぶ』 89

d 「このまえはそうは云わなかつたぜ」三人のやくざと喧嘩けんかになつたあと、栄二がそのことを語ると、おのぶは話をうまく作つて脇へそらした。その口ぶりで、本当のことを云つてはいないかと察したが、栄二はそのまま聞きながしたのであつた。「云わなかつたわ、だつて云おうつたつて云えることじゃないんですもの」

同 99

e 「だから僕は、実に具体的に、将来の生活設計の話な

んかしてたんだ。そしたら、あなたつて、そんなことしか考えていないの、つて言われたんだけどね」「そりや、そうさ」「どうして」「だつて、その人、銀行員でしょう。いつも会社で計算ばかりさせられてるんだもの。家へ帰つたら、せめて、夢を語りたいたいと思ふよ」

曾野綾子『太郎物語』 271

f 「いやだわ、お父さんたら、鯨みたい」美幸は言つた。「いい気持ちそうだね、できるだけ起きないでおいであげよう」「起きなかつたら、大変ね」千頭慶子が、美幸の顔を覗のぞきこみがら笑つた。「どうして」「だつて、毎日、二時間はたつぷり昼寝するんですもの。午前中の診療しんりょうが十二時まででしよう。それから一時まで、ゆつくりご飯食べて、お腹はらいっぱいになつたところで、三時までぐうぐう寝るの」

同 1099

g 「僕はほんの何日か前にここに来たばかりだよ」「何日か前？」と彼女はびつくりしたように言つた。「じゃあそれはきつと人違いだと思ふわ。だつて、私は生まれてからずっとこのかた街の外に出たことはありませんもの。私に似た人だつたんじゃないかしら」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』 139

h 「じゃあ六つのおきからずつと学校に行つてないわけ？」「ええそうよ、でもべつにそんなのたいしたことじゃないわ。だつて私、なんだつてできるもの。外国語

だつて四つできるし、ピアノとアルト・サクソもできるし、通信機を組み立てることもできるし、航海術や網わたりも習つたし、本だつていっぱい読んだわ。サンドウィッチだつておいしかったでしょ？」 同 600

i 「天気予報は見なかった？」「そんなの見なかったわ。だつて私は一日中あなたの家を探しまわつていたんだもの」 同 1102

さて、以上のような文末モノ文を歴史的に遡ると、近世あたりから見出されるようである。

(17) a 善兵 「アイ、かけやした。女房が壹人りの弟だもの、医者よ薬よと騒げ共、「ア、苦しい」と言つたが別れ。しかも立派な医者殿に、見せたが所詮かなわぬと、幾人呼んでもお断りサ。 『お染久松色読販』 236

b 取分けそなたは連合の秘藏に育し娘じゃもの、氣兼苦勞をさせまいと、萬事の事を弁へて、四十にならぬ去年の冬、髪をおろして世を樂に、早ふそなたを父親の、言号被成たる、清兵衛殿へ嫁らせて、初孫の顔見よふぞと、それ樂しみに思ふ内、月に村雲情ない。 同 256

c 「はでな噂を聞てさへ、癩といふ物つい覚へ、在所生れのわたしでも、言号すりや女房じゃもの、勝氣の性

は知りながら、言わで月日をくよくくと、松に時雨のお染さん、連れて共々欠落と、聞いて身も世もあら憎や、我妻返せ憂人は、そこか爰かと追風に、姿しどなく伏し沈む。 同 264

d * 「トいふのもやつぱり此方が無理かへ。これほど苦勞くげんをした者に、まとも此心勞をさせても、向ふに勝を取らせる了簡になつた人の心だもの、事をわけていへばいふほど、結句にくしみを掛られたがるやうなものだ。 『春色辰八園』三編八 359

e 北八 「おらア此茶碗についてくんな。ラツトきたく、きたさのくくく讃岐のこんびら、たかゞ高瀬の舟頭の子じやもの、おさへてどふする。

f 赤次 「それは願つてもない、有がたい事でございます。しかし、それが出来やせうかね 太蔴 「ハテわしが講親だもの、どふでもなる。マア何にしるおくへ來さつし 同 五編追加 291

g 赤次 「きた八きいたか。今の札をうつちやらなんだらよかつたもの。エ、どふしやふ、あとへ戻つても、もふあるめえか 同 八編上 445

h とび 「…何云て、雪が醬油樽ほどの大粒で降る事たもの。一粒降ると足が一尺五六寸づゝ隠れるから、其足を抜ては步行、抜ては步行する内に、丁ど足駄の歯へ雪の溜

た様に股またたきへ雪がはさまつて、ソレ弁慶立往生べんけいたちむじやうせいと来るは。『浮世風呂』四編上 251

以上のように、用法は現代語と大きな違いは見られないが、「名詞＋ダ・ジャ＋モノ」という形が多いように見受けられる。現代語にもこの形が多く見られるし、動詞・形容詞に続く場合も、「ノダ＋モノ」とノダを介して一旦名詞化することが多い。このことは、文末モノ文も、文末モノダ文と同じく、「名詞ハ」「名詞＋ダ・ジャ＋モノ」といった名詞述語文から派生したものであることを彷彿とさせる。

3・3 理論的考察

文末モノ文は、文末モノダ文が（一般論）（当為）（回想）（感慨）（希望）（解説）といったさまざまな用法を持っているような用法の広がりは見られない。むしろ（話し手の個人的事情）を表わす用法一つしかないと言つてよさそうである。ということは、文末ノ文の用法の多くが文末モノダ文の用法と重なるために、文末のノはノダの省略である（ものもある）と言われることもあるのとは対照的に、文末のモノはモノダの省略と言うことはできないということになる。

ただこのように言うのは正確ではないかもしれない。井島（二〇一二・三）で論じたように、文末モノダ文が多くの用法を持つのは、本来モノダ文は、主語の（述語付け）をする

名詞述語文であったものが、異分析によってモノダが終助詞化したためであると考えられる。すなわち主語の（述語付け）の仕方にはさまざまな観点がありえ、それがモノダが終助詞化した後も受け継がれて、さまざまな用法が生じたと考えられた。

しかし一方では、井島（二〇一〇・三）でノダ文に関して論じたように、一旦成立した形式名詞述語文は、形式名詞が受ける命題を、（誰かの認識内容）を表わすものとする働きがある。特に文末に用いられた場合には、さらに特定されて（話し手の信念）を表わすことになる。

これらのことを踏まえて考えると、文末モノ文は、文末モノダ文が成立した段階で、（話し手の信念）を表わすという特徴だけを受け継いで派生し、かつ文末モノダ文から独立した表現となったと考えることができる。ただ、文末モノ文の場合、話し手が事実であると信じていること一般ではなく、（話し手の個人的事情）といった内容に偏ることになる。

もう一つ、文末モノ文の顕著な特徴は、直前の相手の発話、あるいは直前ないし直後の話し手自身の発話に対する（理由）を表わすのが典型的な用法であるということである。典型的ではない場合でも、発話はしていなくても話し手の取つた行動・振舞いに対して何らかの（理由）ないし、（言い訳）といった意味合いを表わすようである。このことは、何の脈絡もなく突然（話し手の個人的事情）が述べられることは通常

考えられず、しばしばそれは話し手が行った行為に対する〈理由〉を述べるためであると思われる。

以上のように、文末モノ文は、〈話し手の個人的事情〉を〈理由〉として述べる場合に用いられると言うことができそうである。さらにここで、〈理由〉として〈話し手の個人的事情〉を述べるということは、現実起こった事態が聞き手が期待したものと異なっていることを受け、その事態を生じさせた原因理由も話し手の期待したものとは異なっていることを示すことになるだろう。そのため、文末モノ文のすぐ前に、ダツテ・デモなどの逆接の接続詞が多く見られることになると考えられる。

また、文末モノ文は一般的に、女性語といった意味合いがあるように感じられる。実際、多くの文末モノ文の用例は女性の会話文の中に見出されるが、男性が使った例も見られ、不自然というわけではない。〈話し手の個人的事情〉を何らかの事実の〈理由〉として述べるというあり方が、女性語と親和性が高いということなのだろう。

4 モノナラ

4・1 モノナラの用法

モノナラはかなり特異な振舞いをする。第一に条件節に顕著な偏りがあり、推量表現（～ウモノナラ）と、可能表現（～デキルモノナラ）とがその大半を占め、その他のものが若干あるといった状況である。また第二に、それと連動して主節に関しても、可能表現が条件節である場合の主節は〈意志〉〈依頼〉〈禁止〉〈命令〉〈希望〉などを表わし、推量表現が条件節である場合の主節は〈推量〉、あるいは〈事実〉などを表わすといった特徴がある。

ウ・ヨウについたモノナラは、主節に〈推量〉、あるいは〈事実〉をとる。モノナラ節は、多く未実現の事態か、過去に複数回繰り返された事態を取るが、過去の一回的事態を取らないわけではない。

(18) a しかし、「アドルフ」の作者ほど、そういう弱々しい性格（恐らくそれは彼自身であろうけれど）に対するはげしい憎悪ぞうおも持っていない、むしろそういう自分自身を甘やかすことしか出来そうもない私がそんな小説の真似なんかしようものなら、それによって更さらにもう一層自分自身をも、又他人をも不幸にするばかりであることが、わかり過ぎるくらい私にはわかって来たのだ。

堀辰雄「美しい村」43

b 何としたものであろう、追つて本式の相談となつた場合には漫然といひ逃れのできるはなしではなく、さりとてこの年月の心づくしに対して急に胸をそらして一言のもとに刎ねつけるわけにもゆかず、そのうえこれがひよつと鉄砲政の耳にはいろうものならば薪に油のさわぎとなろうし、あれこれと思ひ惑うにつけても、そもそも一年近く部屋代など滞らしておいたのがまちがえの元ではないか、…

石川淳「葦手」83

c 「そいつは何処ん処が悪いんです」突然又君の無愛相な声でした。私は今までの妙にちぐはぐになつた気分から、一寸自分の意見をすばずばと云ひ出す気にはなれないでいた。然し改めて君の顔を見ると、云わさないじや置かないぞと云つたような真剣さが現われていた。少しでも間に合わせを云おうものなら軽蔑してやるぞと云つたような鋭さが見えた。好し、それじゃ存分に云つてやろうと私もとうとう本当に腰を据えてかかるようにされていた。

有島武郎「生まれ出づる悩み」46

d 「…まあ、我輩も、始の内は苦痛を忘れる為に飲んだのさ。今ではそうじゃ無い、反つて苦痛を感じる為に飲む。はははは。と言つて可笑しく聞えるかも知れないが、一晩でも酒の気が無かるうものなら、寂しくて、寂しくて、身体は最早がたがた震えて来る。寝ても寝ら

れない。…」

島崎藤村『破戒』136

e もちろん、数が多いからといって、ぞんざいなことはできなかった。暗いところで、ちいさい活字を拾うのだから、ちよつとでも、ほやがくもっているとか、シンが曲がつてもいようなものなら、すぐ職工に呼びつけられて、ピシヤリとやられた。その乱暴なことは、とても伊勢屋の番頭などとは、くらべものにならなかつた。

山本有三『路傍の石』550

f ——母より小包み来る。私が鼻が悪いと云つてやつたので、ガラガラに乾してある煎じ薬と足袋と絞り木綿の腰巻を送つて来た。カフエーに勤めているなんて云つてやろうものなら、どんなにか案じるお母さん、私は大きいお家の帳場をしていると嘘の手紙を書いて出した。

林芙美子『放浪記』476

g 鮎太は、彼が清香ばかりでなく、他の如何なる女性をも、愛情の対象として考えることのできないことを、春さんにも清香にも伝えることのできないのが残念だつた。そんなことを話そうものなら、ひどく気障っぽくなつたからである。

井上靖『あすなる物語』224

h じつさい矯正教育はむずかしかつた。むかしの感化院のように、職員が少年達を殴らうものなら、民主主義を盾に人権問題に発展し、職員の方が誹首されるのであつた。

立原正秋『冬の旅』276

i 翌日からしかし家の中の空気がいっぺんし、祖母は台所いっさいとりしきって、哲子に指一本ふれさせず、女中を追い使つて味噌汁は辛いし、朝っぱらから熱い御飯にお茶漬けをすすめ、ずっと東京下町に育つたとかで夕食は午後五時、逸郎の帰りを待つて、炬燵で長話してようものなら、「とつととおやすみよ、いつまでしゃべつてんだね」眼を三角にして怒鳴る。

野坂昭如「ブアボーイ」436

j もし万が一、周二がその兄や姉から泣かされようものなら、下田ナオは自分も胸が一杯になって、その肥満した体軀で周二の小さな身体をおおいつくし、「泣くんじやありません、周ちやま。ほらほら、婆やがついているのですからね」と、だらしなく甘く優しくなぐさめる始末であった。

北杜夫「楡家の人々」691

可能表現についたモノナラは、主節に〈意志〉〈依頼〉〈禁止〉〈命令〉〈希望〉などをとる。

(19) a 範実「君は平中を責める程、淫奔な女を責めないじやないか？ たとい口では責めていても、肚の底では責めていまい。それはお互に男だから、何時か嫉妬が加わるのだ。我我はみんな多少にしろ、もし平中になれるものなら、平中になって見たいと云う、人知れない野心を持つている。その為に平中は謀叛人よりも、一層我我に憎まれるのだ。考えて見れば可哀そうだよ」

芥川龍之介「好色」311

b 猫は少し静かにしているとと思うと、又急に苛立ち、ぎやあぎやあと変な声を出して暴れた。がりがりと箱を掻く音がうるさい。然しそれも到底益ないと思うと、今度はみようみようと如何にも哀れっぽい声で嘆願し始める。猫は根気よくそういう声を続けているが、その内私も段々それに惹き込まれ、助けられるものなら助けてやりたい気持になった。

志賀直哉「濠端の住まい」341

c 亭主は考えて、「こりや御持帰りに成りやした方が御為かも知れやせん」「折角持つて来たものです——まあ、そう言わずに、引取れるものなら引取つて下さい」

島崎藤村「破戒」482

d 「私、家なんかちつとも持ちたくなんぞならないわ。

このまま煙のように呆つと消えられるものなら、その方がずつといい。」

林芙美子『放浪記』538

e しかし、何といつても、日本人は日本人がなつかしい。もとの戦友は忘れられない。異国人の中にひとりで生きているうちに、やもたてもたまらなくなつて、つい灯火にひかれる蛾のように、自分の属していた原隊が入れられている捕虜收容所に行つてみたくなる。そうして、本隊はいつ日本にひきあげるのだらう、自分も帰れるものなら一しよに帰らうか、それともやはりこのままビルマに残らうか、と様子をうかがいにくる。

竹山道夫『ビルマの堅琴』162

f 佐世保の「東郷」の女将鶴島正子は、この年、二月から三月、四月と、大病を患^{わづら}ってずっと床についていて、人生今は六十年というが、もし人間の継ぎ木が出来ると、弱く、弱い自分のあと二十年を山本に継ぎ木して、自分は死んで山本を八十まで生かしてあげたいなどと、そんなことを病床で考えていた。

阿川弘之『山本五十六』1428

g もし何か此所に組織のようなものがあって、戦争に反対する人間が一緒に力を合せてこの戦争を阻止できるものなら、今の僕は悦んでそれに参加するよ。ちっぽけな孤独なんか抛^{ほう}り投げて、みんなの幸福のために闘うよ。しかしそんな組織が何処にあるんだろうね。

福永武彦『草の花』443

h 彼は起き上っていった。怒りが彼の全身を廻った。風になんか負けるものかと思つた。このおれを吹きとばせるものなら吹きとばして見やがれという気になると、風の暴威もまた別のものに感ぜられるのである。

新田次郎『孤高の人』460

i 「それからあなたには結果的に実に申しわけないことをしたと思つとるです」と博士は私に向つて言った。「かわれるものなら私がかわつてあげたいくらいのもんです。…」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』1041

これらの他に、さまざまな動詞や形容詞などに続くモノナラ節がある。ものによつては、(ヨ)ウ+モノナラや「可能表現」+モノナラに近いものもあるが、どちらとも異なるものも少なくない。これらの中には、ナラと置き換えても自然さを感じさせないものも多く、古い用法の名残であるようにも感じられる。

(20) a 「…お母あ様と御一しよに岩代を出てから、わたし共

は恐ろしい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢わぬにも限りません。お前はこれから思い切つて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登つておくれ。…」

森鷗外『山椒大夫』307

b 学資はいままで通りに続けてやるから、やれる所までやつてみる。お前にそれだけの能力があるものならば、能力の限りを發揮するのが正しい生き方というべきだ。お母さんだつてきつと喜んでくれるだろう。

石川達三『青春の蹉跌』154

c お饒舌^{しやべり}の按摩安甲はここまで話す^{はな}と急に黙つて了つた。そして後は何故か少し落ちつかない様子になつて、話をひどく概略にして了つた。つまり蠣太は「どうせ助からないものなら」と云つて自分で腹を切つて、安甲に手伝わせ、腸のよじれを直して了つたと云うのだ。

志賀直哉『赤西蠣太』97

d 「なにしろ、瀬川君や土屋君がああしていたんじゃ、万事私も遣りにくくて困る。同志の者ばかり集つて、一致して教育事業をやるんでもなけりやあ、到底面白くはいきませんさ。勝野君が首座でもあつてくれると、私も大きに安心なんですけれど」「そんなに君が面白くないものなら、何とか其処には方法も有そんなものですかなあ」と郡視学は意味ありげに相手の顔を眺めた。

e どの道死ぬるものなら一足でも前へ進んで、世間の者が夢にも知らぬ血と泥の大沼の片端でも見て置こうと、そう覚悟が極つては気味の悪いも何もあつたものじやない、体中珠数生になつたのを手当次第に掻い除け撈り棄て、抜き取りなどして、手を挙げ足を踏んで、まるで躍り狂う形で歩行き出した。

f 私は、これからいったい何処へ行こうとしているのかしら……駅々の物売りの声を聞くたびに、おびえた心で私は目を開けている。ああ生きる事がこんなになむずかしいものならば、いっそ乞食にでもなつて、いろんな土地を流浪して歩いたら面白いだろうと思う。

g 「金で事がすむものなら、この世の中に刑務所も少年院もなくなるよ。今夜はやすんで、明日、おまえがつきそつて連れ戻してやれ」父は不機嫌だった。

林芙美子『放浪記』 106

h そこで副長の桑原は、灸とか鍼とかを諭えに持ち出し、一見非科学的な古い方法のようではあるが、応用統計学として、結果的に六十パーセント以上適中するものならば、「参考トスルハ可ナラン」というような事を書いて、霞ヶ浦海軍航空隊司令の名で、上申書として提出した。

i 性はもともと、個々の肉体にはなく、種の管轄に属しているのかもしれない……役目を終えた個体は、さつさとまた元の席へと戻つて行かなければならないのだ。倅せなものだけが、充足へ……悲しんでいるものは、絶望へ……死にかけていたものなら、死の床へ、と……こんなべてんを、野性の恋などと、よくもぬけぬけ思いこんだり出来たものである……

j 「蔵王山！」と、背後から、上方から土俵へ姿のよい——もし声に姿があるものならば——たしかに聞き惚れるに足りる声がかかった。それも一つ二つではない。

北杜夫『楡家の人々』 799

安部公房『砂の女』 272

阿川弘之『山本五十六』 417

立原正秋『冬の旅』 333

このように、モノナラはモノ複合辞の中でも、特殊な振舞いをしており、特に現代語では制限の厳しい、(ヨ)ウ・モノナラのような、(ヨ)ウの連体用法が用いられていることなど、一見歴史的に起源が古く遡るものであると予想される。しかしながら用例を調査すると、確かに、モノナラ(バ)という形態は上代に遡るが、(ヨ)ウ・モノナラ(バ)あるいは(可能表現)・モノナラ(バ)の文法化が起こるのは、幕末・明治期であるようである。

まずは上代・中古の様子を見てみたい。

(21) a 思ふ故に逢ふものならば(安布毛能奈良婆)しましくも妹が目離れて我居らめやも

b かずかずに我を忘れぬものならば山の霞をあはれとは見よ 『万葉集』巻十五 三七三

c わうけいあへの右大臣(手紙) 『古今和歌集』巻十六 八五七
おとには聞けども、いまだ見ぬなり。世にあるものならば、この國にももてまうで來なまし。…と言へり。

d (帝は)これをきこしめして、仰せ給ふ、「なか、翁の手に(かぐや姫を)おほし立てたらむものを、心にまかせざらむ。この女もし奉りたるものならば、翁に冠

を、などか賜はせざらん。 同 55

e おなじ人(戒仙)、かの父兵衛の佐うせにける年の秋、家にこれかれあつまりて、宵より酒のみなどす。いまずからむことのあはれなることを、まらうどもあるじも恋ひけり。あさばらけに霧たちわたりけり。まらうど、あさぎりのなかに君ますものならばはるゝまにくうれしからまし

といひけり。 『大和物語』二八 245

f (女は蔵人頭が)雨のふる夜曹司の葎のつらにたちよりたまへりけるもしらで、雨の漏りければ、むしろをひきかへすとて、おもふ人雨とふりくるものならばわがもる床はかへさざらまし

となむうちいひければ、あはれときゝて、ふとはひいりたまひにけり。 同 八三 270

g しろ 薨を 皇子帝 命だに心になふものならば何か別れの悲しからまし
といふ歌も、このしろがよみたる歌なりけり。

同 一四五 310

h また「ほどなきことを、すぐせ」などやありけむ、かひなくてとしくればつるものならばはるにもあはぬみともこそなれ
こたみもなし。 『蜻蛉日記』下 326

以上のように、モノナラ（バ）の用例は、上代から見られる。上代・中古の用例は、モノナラ（バ）条件節の内容は望ましいことではあるが、主節のマシと呼応する例も多いことから、あえて現実とは異なることあるいは実現の可能性の低いことを仮定するために用いられたと考えられる。

ここで、どうして形式名詞モノが組み込まれたモノナラ（バ）が、そのような意味を持つようになったのが問題となる。しかしながら、このことはモノが持つ意味からの派生として説明することは困難なように思われる。むしろこの問題は、井島（二〇・一一・一一）でノダ文に関して論じたように、形式名詞述語文の一般的な特徴から説明すべきではなからうか。すなわち形式名詞述語文は、いずれかの人物の認識を表わすものであると考えられたが、それが特にノダ文末文として話し手の信念を表わす場合には、それが他者の期待と対立するものとして用いられると論じた。ここではモノダ文が仮定条件句に用いられるのであるが、モノナラ（バ）節が話し手の期待（条件節なので）を表わすと考えると、それに対応するのは事実であると考えられる。ということは、モノナラ（バ）節は、現実と異なることをあえて想定するために用いられたのではないだろうか。すなわちモノナラ（バ）は、反実仮定と親和性の高い形式として成立したと考えられる。

ちなみに、モノナラ（バ）節も、Aハ「Pモノ」ナリという名詞述語文から、「AハP」モノナリという形式名詞述語

文への展開を経たと考えられるが、用例からすると、すでに上代・中古には形式名詞述語文が成立していたと考えられる。

次に中世の様子を見てみたい。

(22) a 家貞待うけたてまで、「さていかゞ候つる」と申ければ、かくともいはまほしう思はれけれども、いひつるものならば、殿上までもやがてきりのぼらむずる者にある間、別の事なし」とぞ答られける。

『平家物語』卷一上 86

b それに情をかけずして、命をうしなふものならば、年比頼たてまつる弥陀の本願をつよく信じて、隙なく

名号をとなへ奉るべし。 同 卷一上 104

c 若君母に申されけるは、「つゝあにのがるまじう候へば、とくくいださせおはしませ。武士共うち入てさがすものならば、うたてげなる御ありさまども見えさせ給ひ

なんす。 同 卷十二下 395

d 女院「世をいとふところになにもものどひくるやあらむ。あれ見よや、忍ぶべきものならばいそぎしのばん」とて、みせらるゝに、をしかのとおるにてぞありける。

同 卷十三下 428

e 一人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の辺にて、をのこの馬をはしらしむるを見て、「今一度馬を馳するものならば、馬たふれて、落べし。しばし見給へ」

とて立ちとまりたるに、また馬を馳す。

『徒然草』二三八段 281

このように、中世になると、モノナラ（バ）節は、必ずしも望ましい事態を仮定するものではなくなり、非現実の事態あるいは可能性の低い事態を仮定するという意味合いが強くなってきたように思われる。

以上のような状態は近世にも引き継がれるが、幕末には、(ヨ)ウ・モノナラという形式が、明治期には「可能形」・モノナラという形式が生まれる。

(23) a かみ 「：第一が薄しただちで吸物じやさかい、酒の下酒に
なとせうものなら、いつかう能じや。」

b お山 「まだしも色白だから七難も隠すけれど、あれで黒
からうもんならこちとら組さ。」 『浮世風呂』二編上 132

c けち 「ハテ、其様にいはんすな。なんぼも涌てある湯ぢ
やはい。私が内で涌すものなら六文が炭は入るはい。」 同 三編下 216

同 四編下 305

4・3 理論的考察

ここで、非現実の事態あるいは可能性の低い事態をあえて仮定するということは、およそ、もし現実とは異なった事態が生じていれば実際とは違った状況が生じていただろう、と

いう認識的 (epistemic) な表現をする場合か、もし現実とは異なった行為が可能であれば何らかの行為を行え、行おう、行いたいなどの義務的 (deontic) な表現をする場合のいずれかとなるだろう。実は個々の用例は上代・中古からそのような偏りが見られるのであるが、それが形態的にも、認識的條件文の場合に(ヨ)ウ・モノナラ、義務的條件文の場合に「可能形」・モノナラというように分析的に分化したのが幕末・明治初期であったと考えられる。

ただここで、認識的條件文の場合に用いられる(ヨ)ウ・モノナラであるが、推量助動詞(ヨ)ウが近現代には連体修飾をすることが、例外的な場合を除いて非常に不自然となるということと一見逆行しているように見える。しかし他方では、古典語ではムの連体用法は、非現実の事態を表わすものであった(井島(二〇一四・一))。その点では、藤田(二〇一三・一〇)の、現代語の(ヨ)ウ・モノナラ節が非現実の事態を表わすという指摘は、当を得たものと言える。そこで、(ヨ)ウ・モノナラという形式は、幕末のまだ(ヨ)ウ(ないしム)が非現実の事態を表わすことができた段階に成立したために、近現代になって(ヨ)ウの連体修飾がほとんどできない時代にも、化石的に残存しているのであると考えたい。

さて、近現代になってこれらの構文には、さらなる変化が生ずることになった。それまでは、前件のモノナラ(バ)節が現実とは異なるあるいは実現の可能性が低いことを表わす

表現であったものが、次第に後件の主節事態の意外性を表わす表現へと変化してきた。このことは、前件の非現実生あるいは実現可能性の低さが、歴史的に低下してきたことに起因すると言えるのではないだろうか。すなわち、前件の特徴の不明確化にも拘わらず、構文全体としての「強調」といった意味合いが後件に影響を与え、後件が常識的に、前件から予想される内容を越える事態であることを表わす表現へと変化したものと考えられる。

このようなモノナラの特異性は、増倉（一九九六・三）も指摘するように、田野村（一九九〇・一）が提示したナラの二類型、すなわち「状況設定」と「実情仮定」とに関わるように思われる。後者は何らかの現実の状況の存在を認めた上で（話し手はその現実の状況を知っている場合も知らない場合もある）、その条件下で何らかの判断を下すものであり、ノナラと置き換え可能であるのに対して、前者は現実とは関わりなくある状況を設定して何らかの判断を下すものであり、ノナラと置き換えることはできない。

5 モノダカラ

5・1 モノダカラの用法

モノダカラ順接確定条件節は、〈話し手の個人的事情〉を、何らかのすでに実現した事態の〈理由〉として提示する場合に用いられるようである。このことは、第3節で検討した文末モノ文が、〈話し手の個人的事情〉を前後の他の文で表わされた事態の〈理由〉として提示するものであったことが想起される。文末モノ文は、他の文に対して〈理由〉を提示していたが、それを条件節と主節として一文で表現するものがモノダカラ順接確定条件節を用いた文であると了解することができる。

(24) a 「お前はなりが小さかったものだから、帝国館の横木の上へ腰をかけて、私の肩に掴まりながら絵を見たんだよ」と私が云えば、「譲治さんが始めてカフエエへ来た時分には、イヤにむツつりと黙り込んで、遠くの方からジロジロ私の顔ばかり見て、気味が悪かった」とナオミが云う。

谷崎潤一郎『痴人の愛』336

b 「それがナオミの手なんですよ、僕もそう云われたものだから、それを信じていたんですよ。……そうして君は、熊谷とそうなっているのをいつ発見したんです？」

同 402

c 「まだあるという程の理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないことと耻はじのよう極きまが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それ程の耻でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んで見ようという元気が出なくなったのでしよう。まあ早く云えば老い込んだのです」

夏目漱石『こころ』123

d 「…一体運などと云うやつは、皮肉に出来ているものだからな。して見れば何でも一心にひがみでないと思う事だ。そうすると今にもあの女が、——おや、もうみんな寝始めたらしいぞ」

芥川龍之介「好色」299

e 「…誰か相手があるだろう、腰元あたりに。年のいった奴は駄目だよ。年のいった奴には恥知らずの物好きなものがあるものだから、そういう奴にあつたら失敗する。何でも若い綺麗事きれいごとの好きな奴でなければいけない」

志賀直哉「赤西蠣太」109

f 「何故、君はそうだろう」と銀之助は同情の深い言葉ことばを続けた。「僕がこういう科学書生で、平素其方の研究にばかり頭を突つ込んでるものだから、あるいは僕見たようなものに話したつて解わからない、と君は思うだろう。しかし、君、僕だつてそう冷い人間じゃ無いよ。他の手疵てみずを負つて苦しんでいるのを、傍で観みて嘲笑わらつてるような、そんな残酷な人間じゃ無いよ」

島崎藤村『破戒』584

g 「私は人類とか、自然とか云う言葉ではあらわせない、ある或るものがあると云うのです。そのものに身を任せる時にだけ人間は安心を得られるというのですよ。ところが他の人はそのあるものは何んだか見せてほしいと云うのよ。私は見えないものだから見せようがないと云つたのよ」又皆は氣持よさそうに笑つた。野島もその仲間入りした。

武者小路実篤『友情』106

h 「ところでサンドウィッチをもう少し召しあがらんですか？ まだ少し残つておるし、私は研究しておる最中はほとんど食事をせんものだから、残しておくのもどうももつたいない」

村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』174

(25) 「私」をはじめとする視点人物の〈個人的事情〉を表わすために用いられていると言つてもよさそうである。

a 娘は島村とちようど斜めに向い合つていることになるので、じかにだつて見られるのだが、彼女等が汽車に乗り込んだ時、なにか涼しく刺すような娘の美しさに驚いて目を伏せる途端、娘の手を固くつかんだ男の青黄色い手が見えたものだから、島村は二度とそつちを向いては悪いような気がしていたのだつた。川端康成『雪国』11

b 彼女はわざとらしく顔をしかめて見せた。それからす

こし恐いような眼つきをして花畑の一部を見つめだした。熱心に絵を描こうとしているときの彼女が、こんな男のような、きびしい眼つきになるのを私はよく知っていたものだから、私はそれつきり黙っていた……。

堀辰雄「美しい村」119

c 何でも母親の言葉に依ると、彼等はナオミを持って扱っていたらしいので、「実はこの児は芸者にする筈でございまして、当人の気が進みませんものですから、そういつまでも遊ばせて置く訳にも参らず、抛んどころなくカフエエへやつて置きましたので」と、そんな口上でしたから、誰かが彼女を引き取って成人させてくれさえすれば、まあともかくも一と安心だと云うような次第だったのです。ああ成る程、それで彼女は家にいるのが嫌だものだから、公休日にはいつも戸外へ遊びに出て、活動写真を見に行ったりしたんだと、事情を聞いてやると私もその謎が解けたのでした。

谷崎潤一郎『痴人の愛』35

d 植惣のかみさんの話に依ると、彼女が始めて下検分に来た折には、熊谷の「若様」と一緒にやって来て、あたかも「若様」の一家の人であるかのように振舞っていたばかりでなく、前からそう云う触れ込みだったものだから、よんどころなく先のお客を断つて、部屋を此方へ明け渡したのだと云うことでした。

同 384

e 先生は始めから私を嫌っていたのではなかったのである。先生が私に示した時々の素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠くしようとする不快の表現ではなかったのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づく程の価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える。

夏目漱石『こころ』20

f その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解らない変なところを東京から持って帰った。昔でいうと、儒者の家へ切支丹の臭を持ち込むように、私の持つて帰るのは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、何時かそれが父や母の眼に留った。私はいよいよ面白くなくなった。早く東京へ帰りたいくなった。

夏目漱石『こころ』114

5・2 古典語のモノダカラ（およびモノナレバ）

モノダカラを歴史的に遡ってみようとしても、順接確定条件を表わす接続助詞カラは近世以前には遡れない。そこで、それに対応するモノナレバを見てみると、中古から用例が見られる。

a 世中にある人、ことわざしげきものなれば、心におもふことを、見るもの、きくものにつけて、いひいだせるなり。

『古今和歌集』仮名序

b 身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても経ぬる世

にこそありけれ

同 卷十五 八〇六

c 命の限りあるものなれば、惜しみとどむべき方もなし。いかでか、この人の御ために残しておく魂もがな。わが子どもの心桜も知らぬを」とうしろめたう悲しきことに言ひ思へど、心にえとどめぬものにて、亡せぬ。

『源氏物語』閨屋 二 354

d (総合合せの場で) 例の四季の絵も、いにしへの上手どものおもしろき事どもを選びつつ筆とどこほらず描きながしたさるさま、たとへん方なしと見るに、紙絵はかぎりありて、山水のゆたかなる心ばへを見せ尽くさぬものなれば、ただ筆の飾り、人の心に作りたてられて、今の浅はかなるも昔の跡に恥なく、にぎははしく、あなおもしろと見ゆる筋はまさりて、多くの争ひども、今日、かたがたに興あることども多かり。

同 総合 二 276

e 内大臣 近江の番 「…なべての仕うまつり人こそ、とあるもかかるも、おのづから立ちまじらひて、人の耳をも目をも、必ずしもとどめぬものなれば、心安かべかめれ。…」とのたまひさしつる、

同 常夏 三 235

f 世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあたりのことは、言ひあつかふものなれば、はじめつ方は、「対の上いかに思すらむ。御おぼえ、いとこの年ごろのやうにはおはせじ。すこしは劣りなん」など言ひけるを、

同 若菜上 四 85

g 左近中将・右中弁主 一「その昔の御宿世は目に見えぬものなれば、かう思ひのたまはするを、これは契り異なるともいかがは奏しなほすべき事ならむ。…」など、二どころして申したまへば、

同 竹川 五 88

h 今様は、をさをさなべての人の今は好まずなりゆくものなれば、なかなかめずらしくあはれに聞こゆ。

i 秋はてて、冬はついたり、つごもりとて、あしきもよきも、さわぐめるものなれば、ひとりねのやうにてすぐしつ。

『蜻蛉日記』上 157

j と許ありて、「男どもはまわりにたりや」などいひて、起きいでて、なよやかなる直衣、しほれよいほどなるかいねりの桂ひとかさね、たれながら、帯ゆるゝかにて、あゆみいづるに、人々「御粥などけしきばむめれば、「れいくはぬものなれば、なにかはなにに」と、心よげにうちいひて、「太刀、とくよ」とあれば、大夫とて、實子にかたひざつきてゐたり。

同 下 257

これらの用例を見渡してみると、いずれも(一般論)を表

わしているようである。ということ、モノナレバ条件節は、モノナリ（モノダ）の（一般論）用法が成立したことを承けて、それを順接確定条件節として用いたものであると考えることができる。

モノナレバ条件節が（一般論）を表わすということに関しては、近世も事情は同じである。

(27) a ○「…日毎にうつす鏡臺は、おろの鏡のおろかなる、心をてらしてうわきをつゝしみ、不貞の女となるまじと、思ひてさへも親兄弟のために苦み、不義不実といはれる時節もあるものなれば、かへすがへすも娘御達の身にはつゞれを着たまふとも、心に錦のはれ小袖、操の衣の継は、肩身も広しと思ひ定めて、

『春色辰巳園』初編二 271

b 又秋になれば鳩すなはち鷹となりて、鷹の眞似するものなれば、時に随ひ折によりて、色々になり替り世を渡る業を致し、人を諂ひ欺すものを鳩の戒とは申すとなり。

『浮世物語』 270

c 又、強異見は耳に止めぬ壯者も、含笑ある教訓は、聴くに倦ざるものなれば、自然と心にとむるものなり。

『浮世風呂』二編上自序 111

一方で、近世にはモノ（ン）ダカラという形式も成立しており、こちらにも以下のように、（一般論）用法が見られないわけではない。

(28)

a 藤「ヤレくマア知らねへ事とはいひながら、沢山苦勞をさせたツけノ。モウく斯して奇會からは、憚りながら大丈夫だと思ひなせへ」由「そふやさしく被仰と真に嬉しく思ひますけれど、どふもおまへさん方に限らず、男子達といふものは浮薄なもの」だから、いとゞおもひがますやうなことが、この末ともに有ふかと案じられますは

b とり「…精進日をわすれて、油揚を一枚焼つたり、お備や七色菓子を上るよりか、生て居る内に初松魚で一盃飲せる方が、遙に功德だとの、さうだろう。おばさん。さういふものだからの。

『浮世風呂』二編上 124

c お川「…何でも気の合た夫婦が互の仕合。長い月日にやア好事ばかりもねへもんだから、兩方で不肖仕合ふのさ。

同 三編下 214

d วัตถุの事が一旦はかぶれるけれど、善悪は三歳児にもわかるものだから、是は悪いとおもふ事は、ながく續かねへはな

同 四編上 244

しかしながら、多くの用例はモノ文末文と同じく、（個人的事情）を表わしているようである。モノ文末文もその前後の文の（理由）を表わすものであったが、それを条件文として一文で表わすために用いられたのが、モノダカラ条件節であったと考えられる。

(29) a *「…そうよきれてしまふといつて、恋の諸訳も達人

れも、もちやくちやにして、そうくくに切てしまつて、女房の仇吉さんに、心のうちを休めさしておやりだろうが、何をいふにも、私がやうなぐうたらな行とどかねへものだから、しかたがないはネ。

b 仇 「…私だつても、おまへを苦勞して呼にやつて、言ぐさをいふのなんのといふこともねへけれど、ツイくおまへの顔を見たもんだから、あの時のくやしいことを、胸にわたする間がなかつたもんだから、いひだしたんだアネ。

同 三編九 381
c 繁次 「イヤ、わつちらは、かたつきしなにもしりやせん。…たゞ此男がほんのしやれに、きものかしたばつかりで、うたがひうけたといふもんだから、どふぞあなたのおとりなしで、わつちらをたすけて下さいませ。

『東海道中膝栗毛』六編下 366

d 光 「…大井川でもあべ川でも臺越といふをすると、川ごしの賃錢が四人まへに、かの臺の賃が吾人前出やす、所を梯子持參といふものだから、川ごしの賃錢ばかりで、臺の賃がかすりになりやす。

同 七編下 398

e 文里 「こふ久しくころやすくしたものだから、こねへといつても、もしつきやいで来たくらいなら、階子迄來るから、いま迄のよふに、ころやすくあつてくんやよ。

『傾城買二筋道』 457

f 文里 ありやア三年もこふ來たものだから、まさかにあいそうぶりだわな。 同 461

g 通り者 「今やぼな侍が、うたをうたう。河東ぶしを、ならはしやい。おらが内えは、雅十はじめ段次も筆次郎も、來るもんだから、誰にならをもすきだ。

『遊子方言』 280

h 三助 「…半分薯蕷だ物が、がらゝ鰻なつたもんだから、あつちいぬたくり、こつちイのたくり、抓べいとしても指の股さ、ぬるくぬるくかん出て、によるヲりく鰻のぼりイするだア。『浮世風呂』前編上 72
i とび 「…ざつと三里もある道法の所を、山も谷も雪で埋るもんだから、雪車といふ物に乗と、ずるくくと迂り出して、三里の道を煙草一服の間に飯りやす。 同 四編上 252

5・3 理論的考察

モノダカラ条件節には、文末モノダ文のような多様な用法は見られない。モノダカラ条件節が表わすのは、いずれも「話し手の信念」であるといつてよい使い方で、多く話し手が経験によつて知っている事実である。このことは、モノダカラ条件節は一旦モノダ文を経由して成立したのではなく、モノダ文とは独立して文法化したために、形式名詞述語文一般が

持つ〈話し手の信念〉といった意味を持つようになり、そこから〈話し手の個人的事情〉を表わすようになったのである。同じくモノを用いた順接確定条件節であっても、モノナレバは〈一般論〉を表わし、こちらはモノナリ（モノダ）の用法を受け継いでいるのとは対照的である。

しかしながら、同じく〈話し手の信念〉を表わすとは言うものの、モノダカラはノダカラと同じ文脈で用いられるわけではない。田野村（一九九〇・二）のノダカラの用例を用いてモノダカラと比べると、ノダカラが用いられる状況でモノダカラを用いると不自然である。

(30) a せっかくここまで来た〔んだから／*もんだから〕、見て行こうか。

b もう小学生な〔んだから／*もんだから〕、それくらいのこととは自分でしなさい。

c 君がそう言う〔んだから／*もんだから〕、間違いはあるまい。

逆にモノダカラが用いられる状況でノダカラを用いても不自然となる。高宮（二〇一二・三）の例文に若干手を入れて示す。

(31) a 食うことができない〔もんですから／*んですから〕、聞せつけんなんか作って売ってたんですよ。

b そのうち行ってもいいって言い出した〔もんだから／*んだから〕、それで長い間、二年ぐらいアフリカに行

くことになりました。

ノダカラをモノダカラに置き換えてできないことに関しては、井島（二〇一四・三）でも論じたように、ノダカラ条件節の多くが《再認識誘発》用法、すなわち聞き手も前もって知っていたことを思い起こさせるものであると考えられた。

こう考えると、ノダカラ節が聞き手も知っていることであること、およびノダカラ条件文を「くノダ。ダカラく」と二文に分割することができないことが合理的に説明できた。すなわち、《再認識誘発》とは聞き手の再認識を誘発することであり、文末ノダ文にはそもそも《再認識誘発》用法がなかった。それに対して、モノダカラ条件節には《再認識誘発》用法のような用法は見出されない。

ノダガ条件節が「相手は前件の事態を知らない」場合の用いられるのに対して、ノダカラ条件節が「相手も前件の事態を知っている」場合に用いられるという対照的な違いがあることは、野田（一九九七・一〇）に強調して論じられている。しかるに、聞き手の知っていることを条件とすることは特殊な場合であると考えられるので、むしろノダカラ条件節の使用条件が特殊であると考えられた。

ここでモノダカラ条件節に戻ると、こちらは聞き手が知らないことを表わしているようであるから、やはりモノダカラ条件節の振舞いの方がノーマルで、ノダカラ条件節の振舞いは特殊であったと考えられる。このようにモノダカラ条件節

は、聞き手の知らないことというばかりでなく、文末モノ文と同じく〈話し手の個人的事情〉を表わしている。

さて、高宮(二〇・二一・三)によると、「ものだから」は自分が気にしていること、自分を弁護したいことを言うときに使う」のに対して、「のだから」は、話し手と聞き手に対する点があり、説得するときに使われる」と論じて、モノダカラは「自己弁護」という働きを持つと主張する。「自己弁護」とは、相手の知らない〈話し手の個人的事情〉を何らかのすでに起こった事態の理由として提示するものと考えられる。とすれば、この主張は本稿の議論と合致することになる。ちなみに、およそカラ条件節をとる主節は〈希望〉〈意志〉〈命令〉などのいわゆるモダリティ表現となる傾向があるのに対して、モノダカラ条件節をとる主節はおよそ〈事実描写〉となることも、この議論を支持する。

おわりに

形式名詞モノを含む複合辞の意味機能は多岐にわたり、モノの持つ〈事物〉〈物品〉といった意味から導かれるとは考えがたい。ここでは、第一に、一旦モノダを経由して、モノダの持つさまざまな意味用法のうち特に〈一般論〉から派生したと考えられるもの(モノカ)、第二に、文末の形式名詞述語文が一般的に持つ意味機能、〈話し手の信念〉から派生

したと考えられるもの(モノ・モノナラ・モノダカラ)に分けられそうである。

とはいうものの、ここで論じることのできなかつたモノを含む複合辞に、モノデ・モノノ・モノヲ(モノカラ・モノユエ)がある(後の二語は現代語では用いられない)。これらについてもさらに検討を加えたい。

資料

万葉集・源氏物語『日本古典文学全集』、竹取物語・伊勢物語・古今和歌集・大和物語・土佐日記・蜻蛉日記・平家物語・徒然草・浮世物語・お染久松色説販・春色梅児誉美・春色辰巳園・傾城二筋道・遊子方言・東海道中膝栗毛・浮世風呂『日本古典文学大系』、近現代小説『CD-ROM 版新潮文庫』一〇〇冊

参考文献

佐伯 梅友(一九五三・五)「接続助詞『ものの』と『が』について」『金田一博士古稀記念 言語・民俗論叢』三省堂書店 pp.395-414(『もの』と『が』—接続助詞—)(一九六六年)
書三 pp.88-106)
木之下正雄(一九五七・二二)「接続助詞的用法のハ、モノハについて」『鹿児島大教育研究紀要』第九号
井手 至(一九六七・一)「終助詞ぜ・さ・わ・の・ものか(もん

か) (現代語) 『国文学』第十二卷第二号 学燈社

山口 明穂 (一九六七・一) 「接続助詞ものから・ものゆゑ・もの
〈古典語〉ものを〈古典語・現代語〉から・ので〈現代語〉」
『国文学』第十二卷第二号 学燈社

鎌田 廣夫 (一九七〇・三) 「助詞「ものを」について——天草本平家

物語を中心に——『語学文学』第八号(北海道教育大学)
山内洋一郎 (一九七〇・一) 「特集 日本語における助詞の機能と
解釈——接続助詞「が・に・を・ものから・もの・もの
を(から)〈のび〉〈のに〉」『国文学 解釈と鑑賞』第三十
五卷第十三号

安達 隆一 (一九七七・三) 「名詞句構造における「モノ」「コト」「ノ」——
統語論的構造の差異を中心として——『国語国文学報』第一
三十一号(愛知教育大学)

山内洋一郎 (一九八一・九) 「接続助詞「ものから」「ものの」につい
て」『奈良教育大学国文 研究と教育』第五号

藤原 与一 (一九八二・一二) 「名詞系の転成文末詞「モノ」「方言
研究年報』続七号

東辻 保和 (一九八三・六) 「文末助詞「ものか」考」『河』第十七号
佐竹久仁子 (一九八四・一〇) 「特集・複合辞@くものでくものく
ものを」『日本語学』第二卷第十号

玉村 禎郎 (一九八四・一〇) 「特集・複合辞@くものなら」『日本語
学』第三卷第十号

王 暁宇 (一九八五・七) 「ものの」は形式名詞だとの説は正しく

ない」『日本語教育研究論纂(在中華人民共和国日本語研修
センター紀要)』第四号 pp.45-50 (国際交流基金在中華人
民共和国日本語研修センター)

前田 尚作 (一九八六・九) 「連体表現の日英照合——「コト」表現と
「モノ」表現——『天理大学学報』第三十八卷第一号 pp.1-20

田野村忠温 (一九九〇・一) 「現代日本語の文法I——「のだ」の意味
と用法——和泉書院

初山 洋介 (一九九〇・一〇) 「現代日本語「モノ」の諸相」『Literatura』
第十一号 pp.1-27 (名古屋工業大学)

吉野 政治 (一九九二・一二) 「散文のモノユエ(二)と和歌のモノユ
エ(二)」『同志社女子大学学術研究年報』第四十三卷第四
号 pp.301-313

山本 淳 (一九九三・三) 「近代語の助詞くものをくくものく考」『国
学院大学大学院紀要 文学研究科』第二十四号 pp.371-396

田吹 昌俊 (一九九三・八) 「モノ・コト視点からの「の」節の分析——
通信によるニュース記事の分析から——」『言語学からの眺
望 福岡言語学研究会20周年記念論文集』pp.375-389 (九
州大学出版会)

吉野 政治 (一九九三・一二) 「逆接用法モノユエ(二)成立私案」『同
志社女子大学学術研究年報』第四十四卷第四号 pp.90-109

伊藤 勲 (一九九四・五) 「ものの」の用法」『国際学友会日本語
学校紀要』第十六・十七号 pp.63-73 (国際学友会日本語学
校)

大野 晋 (一九九四・一一) 「連載：日本語学——日本語とタミル

語の関係(42) 番外(2)・助詞モノヲ・モノカ」『国文学
解釈と鑑賞』第五十九卷第十一号 pp.197-202

中里 理子 (一九九六・三) 「ものの」の意味・用法について『東

京大学留学生センター紀要』第六号 pp.95-109

増倉 洋子 (一九九六・三) 「ものなら」について考える』『長崎大

学外国人留学生指導センター紀要』第四号 pp.119-136

須田 淳一 (一九九六・七) 「特集：対照研究と日本語文法——東アジ

アの言語と日本語——方言と標準語」対格標識の曖昧性
上代「を」・「ものを」形式と韓国語の対格意識』『国文学

解釈と鑑賞』第六十一卷第七号 pp.134-139 至文堂

佐藤 雅代 (一九九六・九) 「和歌の末尾表現「ものを」について

てにをは意識の「様相」』『文芸研究』明治大学文学部紀要』

第七十六号 pp.75-87

坪根由香里 (一九九六・一一) 「終助詞・接続助詞としての「もの

の意味——「もの」・「ものな」・「もの」・「ものを」——』『日

本語教育』第九十一号 pp.37-48

中里 理子 (一九九七・六) 「逆接確定条件の接続助詞「ガ・ノ・ニ・

モノ・ノ・テモ・ナガラについて——』『言語文化と日本語教

育 平田悦郎先生退官記念号』第十三号 pp.160-170 (お茶

の水女子大学)

池上 素子 (一九九七・一〇) 「の」・「ながら」・「もの」・「けれ

ども」の使い分けについて』『北海道大学留学生センター

紀要』第一号 pp.18-38

野田 春美 (一九九七・一〇) 「の(だ)」の機能」くろしお出版

田辺 和子 (一九九八・三) 「形式名詞「モノ」における文法化とし

ての文脈化と主観化』『日本女子大学紀要 文学部』第四

十七号 pp.51-65

安達 太郎 (一九九八・六) 「認識的意味とロト・モノの介在』『世界

の日本語教育 日本語教育論集』第八号 pp.203-217 (国際

交流基金日本語国際センター)

北條 淳子 (一九九八・六) 「モノ」のモダル性——日本語教育の立

場から——』『早稲田大学日本語研究教育センター紀要

設十周年記念号』第十一号 pp.59-75

伊丹 千恵 (二〇〇〇・三) 「の」の意味と用法について』『東

京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第二十六号

pp.231-240

尾形 理恵 (二〇〇一・三) 「もの」の意味と用法』『東京外国語

大学留学生日本語教育センター論集』第二十七号 pp.1-15

田辺 和子 (二〇〇一・三) 「接続助詞「もの」の文法化に伴う謙

歩的意味の創出について』『日本女子大学紀要 文学部』

第五十号 pp.101-114

竹部 歩美 (二〇〇二・三) 「中古のモノヲとモノカラについて』『国

語研究』第六十五号 pp.47-60 (国学院大学)

案野 香子 (二〇〇二・三) 「疑問文におけるモノダの機能』『静岡大

学留学生センター紀要』第一号 pp.39-56

- 案野 香子 (二〇〇三・三) 「〈反語〉のモノカ文の表現機能—動詞句を中心に—」『静岡大学留学生センター紀要』第二号 pp.13-24
- 竹部 歩美 (二〇〇三・三) 「接続助詞モノノに(こ)つ」『国学院大学院紀要 文学研究科』第三十四号 pp.221-241
- 増倉 洋子 (二〇〇三・七) 「社説文にみられる「くもの」と「ながら」—社説文において両者の果たす機能の違いを考えた—」『比較文化研究』第六十号 pp.35-45
- 山口 康子 (二〇〇四・二) 「ものから」考」『国語と教育』第二十八号 pp.53-61 (長崎大学)
- 青野 順也 (二〇〇四・六) 「助動詞「まじ」の成立が誘発した接続助詞「を・も・sを」」『国学院雑誌』第百五巻第六号 pp.17-29
- 陳 志文 (二〇〇四・二) 「モノ」の各用法における意味のつながり—本質的な意味とその展開—」『言語科学論集』第八号 pp.49-60 (東北大学)
- 山口 佳也 (二〇〇四・二) 「ものか」の反語文に(こ)つ」『十文字学園女子大学短期大学部研究紀要』第三十五号 pp.50-41
- 中島 紀子 (二〇〇五・三) 「モノナラ」に関する一考察」『国文学踏査 神泰純先生・倉持保男先生頌寿記念号』第十七号 pp.205-196 (大正大学)
- 衣畑 智秀 (二〇〇五・一) 「上代語のヲ・モノヲ その起源をめぐって」『和漢語文研究』第三号 pp.49-63 (京都府立大学)
- 原 裕 (二〇〇六・三) 「万葉集における「ものを」の用法に(こ)つ」『中央大学国文』第四十九号 pp.33-47
- 塩塚 香織・江口 正 (二〇〇六・二) 「文末表現「モノカ」に(こ)つの考察」『福岡大学日本語日本文学』第十六号 pp.264-249
- 宮内佐夜香 (二〇〇七・六) 「近世後期江戸語における情意的逆接表現の実態 ノニ・モノヲの用法の差異について」『都大論究』第四十四号 pp.1-13 (東京都立大学)
- 竹部 歩美 (二〇〇八・三) 「逆接のモノユエに(こ)つ」『人文学報』第三百九十八号 pp.1-21 (首都大学東京)
- 鈴木 英夫 (二〇〇八・一〇) 「接続助詞モノノデに(こ)つ」『銀の匙』を中心に—」『近代語研究』第十四巻 pp.307-324 武蔵野書院
- 宮内佐夜香 (二〇〇八・一〇) 「近世後期江戸語・明治期東京語における助詞モノヲとモノに(こ)つ」『近代語研究』第十四巻 pp.211-230 武蔵野書院
- 松田 瑞江 (二〇〇九・二) 「理由表現としてのモノ構文」『早稲田大学院文学研究科紀要』第五十四巻第三号 pp.51-59
- 案野 香子 (二〇〇九・三) 「単文のモノカ文の構文的特徴」『言語文化学研究 言語情報編』第四号 pp.75-94 (大阪府立大学人間社会学部言語文化学科)
- 佐藤 順彦 (二〇〇九・三) 「前期上方語のノデアロウ・モノデアロウ・デアロウ」『日本語文法』第九巻第一号 pp.20-36
- 井島 正博 (二〇一〇・三) 「ノダ文の構造と機能」『日本語学論集』

第六号 pp.75-117

角田 三枝 (二〇一・一一)「モノノとナイマデモ―節連接の五つのレベルにおける逆接と譲歩表現―」『国立国語研究所論集』第二号 107-134

井島 正博 (二〇一・三)「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機能」『日本語学論集』第八号 95-143

高宮 優実 (二〇一・三)「自己弁護の「ものだから」―説得の「のだから」、理由の「から」と比較して―」『言語と文化』文
教大学院言語文化研究科附属言語文化研究所紀要』第
二十四号 pp.124-144

井島 正博 (二〇一・一一)「文末ノダ文の構造と機能」『国語と国
文学』第八十九卷第十一号 pp.101-113

藤田 保幸 (二〇一・一〇)「複合辞「〜ものなら」について」『形
式語研究論集』pp.125-154 和泉書院

井島 正博 (二〇一・四・一)「上代・中古語の推量表現の表現原理」
益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』ひつじ書房
pp.249-278

井島 正博 (二〇一・四・三)「条件節におけるノダの構造と機能」『日
本語学論集』第十号 pp.88-110

(いじま まさひろ 大学院人文社会系研究科 教授)